

障害児の母親が小学校教員として再就職に至るまでのプロセス － 複線径路・等至性モデル (TEM) による分析を通して－

田村 美子・藤堂美由紀・木下八重子・船津 守久

The Path of a Mother of a Handicapped Child
to Reemployment as a Certified Elementary School Teacher:
An Analysis through Trajectory Equifinality Model (TEM)

Yoshiko TAMURA, Miyuki Toudou, Yaeko Kinoshita and Morihisa Funatsu

要 旨

障害児の母親が小学校教員として再就職に至ったプロセスを明らかにするために、半構造化インタビューを実施し、修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果を複線径路・等至性モデル (TEM) に示した。母親は「子どもの障害を受容する：EFP」ことから、「療育センターの門をたたく：BFP」ことにより子どもの成長を実感できた。そして、「教員採用試験を受験：OPP」し「人に頼ることを許す：SG」ことにより、周囲の協力を得るようになった。復職・退職・再就職に至るまでを<永遠の命があると限らない>、<諦めに似た納得>、<自分の中の壁>、<大事なものを取り戻す>、<自分に目覚める>、<人生の意味づけ>として現した。母親が小学校教員に復帰しようと思ったきっかけは、子どもの成長を通して、教員という仕事の魅力を再認識したことである。そして、子ども優先の考え方から母親自身が主軸となり、子どもとともに人生を歩むという価値観に変化していった。

キーワード：障害児の母親、就労、自己実現、複線径路・等至性モデル (TEM)

1. はじめに

障害児の母親は、ケアを担う者として自己犠牲をいとわず母親として子どものケアに没頭する姿が、障害児の母親像として考えられている。特に、重度の障害をもつ子どもを産んだ女性は「障害児の母親」として周囲からみられる存在となる (中川, 2003)。わが国では、地域社会における共生の実現に向けて障害者福祉施策の充実のために、平成24 (2012) に障害者自立支援法から障害者総合支援法が成立し、平成26 (2014) 年に全面施行された。福祉サービス体系の再編など、障害のある人が地域で安心して暮らせるよう、福祉サービス提供体制の強化等が図られてきた。

障害のある子どもの発育を取り巻く環境は法律の改正により変わりつつある。しかし、障害児

を養育する親は、子どもの障害を受容するまでの葛藤や生活の制限による困難、家族や親族関係による心身の負担を感じている（中川・根津・宍倉，2009）。

政府の内閣府男女共同参画局は女性の社会進出を推進しているが、子どもの子育ては女性が中心に担っており、母親にかかる負担が大きい。その中でも障害児の母親は一般女性と比較すると就労制限がみられおり、40歳代では約51%が就労していないという報告もある（松澤・江尻，2019）。

障害児の母親の支援は、子どものケアだけでなく、心身の健康や家族を含めた安定した生活や自己実現の機会を考えることが重要である（江尻，2014）。

本研究では、障害児の母親である小学校教員の母親Aさんにインタビューを行った。出産後に育児休暇を取得した後、子どものケアのため退職し、再び小学校教諭として再就職に至るまでのプロセスを明らかにしたいと考えた。そして、障害児の母親が子どもと共に自己実現できるよう支援を行っていくことが重要であると考えた。

II. 研究目的

障害児の母親が出産後の育児休暇から復職・退職・再就職に至るまでのプロセスを明らかにし、自己実現のための支援の示唆を得る。

III. 研究方法

1. 調査対象者

今回の研究協力者は、特別支援学校に通う15歳の母親Aさんである。32週1050gで出産し、脳室周囲軟化症と診断される。母親の年齢は48歳で小学校教諭として働いている。夫52歳と長男22歳の4人家族である。

2. 分析方法

1) インタビューデータを（木下，1999，2003，2009）修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTAとする）を用いて概念生成した。その後、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：以下TEM）の分析手法を用いた。TEMは、人間の成長について、時間的変化を文化との関係で展望する新しい試みを目指したものである（サトウ・安田・木戸・高田・ヤーン，2006）。個々が多様な径路を辿ったとしても、等しく到達するポイント（等至点）があるという考え方を基本とし、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルであり、対象の理解を深め、起こりうる可能性について考察を深めることを目指している（サトウ，2009，荒川・安田・サトウ，2009）。TEM図を描くことで、対象の具体的な経験や時系列を保持し、どんな選択を迫られ、何に影響され決定したのか可視化できる。

安田，サトウ（2016）は、対象者数に対して1人， 4 ± 1 （3～5）人， 9 ± 2 （7～11）人のいずれかにすることを推奨している。1人の場合、聞き取られたデータをもとにしてより詳細に径路を描くことができるとしている。

表1 インタビュー内容

	面接時間/形式	面接の質問項目
第1回	120分/半構造化面接	<ul style="list-style-type: none"> ・出産から現在までどのような経過をたどったか ・困難だとおもったこと ・子どもとの関わりの中で成長したと感じたこと ・仕事を復帰しようと思った理由
第2回	90分/非構造化面接	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事を辞めようと思ったこと ・仕事を復帰してターニングポイントになったこと

2) M-GTAの分析

分析ワークシートは、概念名、定義、バリエーション、理論的メモを作成する。

データから意味のあると思われる箇所を取り上げ、バリエーション欄に転記する。そのバリエーションをもとに定義を意味付けし、その定義に命名し、概念名を作成する。

3) TEMの分析

(1) 人間が時間と共にあることを表す概念「非可逆的時間」(Irreversible Time)、ある選択によって各々の行為が多様に分かれていく地点「分岐点」(Bifurcation Point: BFP)、多様な経験の径路がいったん収束する地点を「等至点」(Equifinality Point: EFP)、論理的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるをえない地点「必須通過点 (Obligatory Passage Point = OPP)」とされる。

(2) インタビューから得られた語りの記述をもとに分岐点を設定し、図示する。MGT-Aにより、Aさんが就労までの思いや課題を、TEMの概念を用いることによりAさんが再就職に至るまでのプロセスを明らかにする。

3. 倫理的配慮

研究への自由参加の保証、途中辞退も可能であること、面接中は答えたくないことは無理に答えずなくてもよいことを説明しながら進めた。プライバシーの保護やデータの管理方法などについて文書および口頭で説明し、署名によって同意を得た。安田女子大学倫理審査委員会の承認を得た(承認番号160016)。

IV. 結 果

Aさんは、大学を卒業後小学校教員として就職し、結婚した。一人目の子どもを26歳で出産した。二人目の子どもを33歳で出産した。

Aさんが育児休暇から復職・退職・再就職に至るまでの思いや課題を逐語録より分析した結果をTEM図に示した(図1)。Aさんは「子どもの障害を受容する: EFP」ことから、「療育センターの門をたたく: BFP」ことにより子どもの成長を実感できた。そして、「教員採用試験を受験: OPP」し「人に頼ることを許す: SG」ことにより、周囲の協力を得るようになった(表2)。

表2 TEMで用いられる概念の意味と本研究における位置づけ

基本的概念	意味	本研究における位置づけ
等至点：EFP (Equifinality Point)	複線往路を辿ったとしても、等しく到達するポイント	子どもの障害を受容する 子どもの脳と機能の可能性を信じる
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	経路が発生・分岐するポイント	療育センターの門をたたく 母子通園を始める
必須通過点 (OPP)	ある地点に移動するために、ほぼ必然的に通るべきポイント	教員という仕事を再認識する 教員採用試験を受験する
社会的ガイド (SG)	何らかの援助的な力が働いていること	人に頼ることを許す
社会的方向付 (SD)	何らかの抑制的な力が働いていること	障害のある子どもを否定する関わり

半構造化インタビューの結果、得られたデータは修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した(表3)。< >は概念を示す。母親の語りは斜体で示す。Aさんは、大学を卒業後小学校教員として就職し、結婚した。一人目の子どもを26歳で出産した。二人目の子どもを33歳で出産した。二人目の出産は、心音が聞こえにくいことと胎動が少ないという理由で、帝王切開での出産となった。出産までは、順調と言われ前日まで勤務していた。子どもは、3ヶ月間NICU(新生児集中治療室)に入院した。

復職・退職・再就職に至るまで、ストーリーラインで下記に示す。

こういう風に生まれてしまったのは、私のせいじゃないかなって自分を責める気持ちがずっとあるんで、それが苦しかったですね。自責の念というか、私がもうちょっと強く産婦人科の先生にしんどいから病休を取りたいんだとかね強く言えばよかったと…。少々お腹が小さいとかあるけど、まあまあそんな人はいっぱいおるよみたいな感じで、これととといった解決策を全然示してくださらなかったの…。そーかなと思いつつながらストレスフルな仕事をしていたので、それがまずかったんじゃないかなって…。思いましたね。なんていうんでしょ。手術台にのるじゃないですか、あれの上で仕事をしすぎていた自分がほんとに最悪だと思って。すごい、自分を否定しましたね。今後、仕事をするとしても絶対に仕事は一生懸命やらんわと思って、それがいけんかったんだわ。こんな事態になってしまったんですね。<ちょっと間違っただけの自分の生き方>じゃないかと。間違っていたしわ寄せがここにいってしまったんじゃないかと思いましたね。自分を責める気持ちが、原因探しをしてしまいましたね。なぜこんな事態になってしまったのかと。それが全部自分じゃないかなって思いましたね。それがきつかったです。その命が心配されたときは、経験してるから命はすごく大事な事なんだなと思うし、当たり前だと思っていたことが当たり前じゃないし、障害をもっているから、例えば哺乳瓶でミルクを飲むという普通のことが、ほんとにスモールステップと重なった、重なったその先にあるという1mlから始まって5CCになり、チューブが外れて、やっとなんかミルク飲んでやっと家に帰れる。普通の子が1週間ぐらいでボンと家に帰る道のりを何か月もかけてっていう。もうすごく小さな階段が見えたく永遠の命があると限らない>ことを実感した。

まあ、なんてうちのなの?とママ友の間ではね、話ししてて、うちじゃなくてもよかったのにな。なんでうちの子が生まれてしまうんだとふいに思う日があるんですよ。何回か。歩いていて石につまずく日が何日間あったけど、何か役割をもって生まれてきとんじやろうと思うんよって。話をママ友としててね。そうだよな。つまずいた話もしないといけんし、でも…。だよな。

表3 分析ワークシートの例

[概念]	大事なものを取り戻す
[定義]	教員という仕事は自分にとってかけがえないものであり、自分そのものである
[具体例]	<p>・そうですね。続けていたらあのまま疲弊したまま、これが永久に続くと思って、かつてにしんどくなっていたかもしれないんですけど1回辞めたことでほんとにデドックスというか、私その当時デドックスしたなと思ったんですねそこで。断捨離。なんか自分が抱えたいた開みないなもの1個おろして、ちょうどいい意味の開き直りがあつてすっきりですけど…。辞めたからといって何か手に入ったわけではない。むしろ私がほんとに1番やりたかった仕事みたいなことを捨ててやるというのは間違いだったのかもしれないと思ったんですね。当時、仕事を辞めたことに対して色々考えていたんですけど。自分の身体にたとえると仕事が重荷で自分の脂肪だと思っていたんですね。それをとればもっとスリムに生きていけると思っただけです。それぐらい重荷だったんですけど…。</p> <p>・仕事辞めてみたら、それは脂肪ではなくて自分の背骨だったということに気がついたんですね。背骨を失ったら私は生きていけない。それがあつたから頑張れたのかもしれないなと思つていたんです。だから仕事に対する考え方も変わつてじゃまものというか。</p> <p>・不必要なものとしか、余分なものにとらえてなくてなかつた仕事が、必要不可欠な私のアイデンティティというか、自分の1つ大事なものだつたと…。だからそれを守りながら子育てもきつとできるような気がして、背骨を失ったら自分が立っていられないじゃないですか。</p> <p>それで子育てができるわけがない逆に…。</p> <p>・その自分にとって大事なものを取り戻したほうが子どもにとつてもこうなんか生まれそうな気がした。それも手放してみなければわからなかつたことなんですよ。</p>
メモ:	障害のある子どもを出産し、子育ては母親の役割だと思ひ、小学校の教員を退職した。仕事を辞めて初めて、教員という仕事の大切さを実感した。

つまずいた話もしないといけんし、でもやっぱり歩こうかという話もせんといけんし、やっぱり全部正直に話していくことで、頑張ろうかみたいなく諦めに似た納得>がありました。友達にちゃんとしたことを話せない、隠そうとしてしまう。受け入れていない自分が1番の壁だつたりした気がします。オープンにうちの子はつて喋れるんですけど、それをようしなかつたですね。ちょっと遅れているだけなんよつて言うのが精一杯という<自分の中の壁>がありました。

仕事辞めてみたら、それは脂肪ではなくて自分の背骨だったということに気がついたんですね。背骨を失ったら私は生きていけない。それがあつたから頑張れたのかもしれないことを思つていたんです。だから仕事に対する考え方も変わつてじゃまものというか、不必要なものとしか余分なものにとらえてなくてなかつた仕事が必要不可欠な私のアイデンティティというか、自分の1つ大事なものだつたと…。だから、それを守りながら子育てもきつとできるような気がして、背骨を失ったら自分が立っていられないじゃないですか。それで子育てができるわけがない逆に…。その自分にとつて<大事なものを取り戻す>ほうが子どもにとつてもこうなんか生まれそうな気がした。それも手放してみなければわからなかつたことなんですよ。もう私がやんなくちゃいけない。子ども優先の考えかた。私がそれに従つていくというか、その子に合わせて寄り添つていくという生き方ではなく、むしろ自分が主になつて、この子を担いででも生きていく

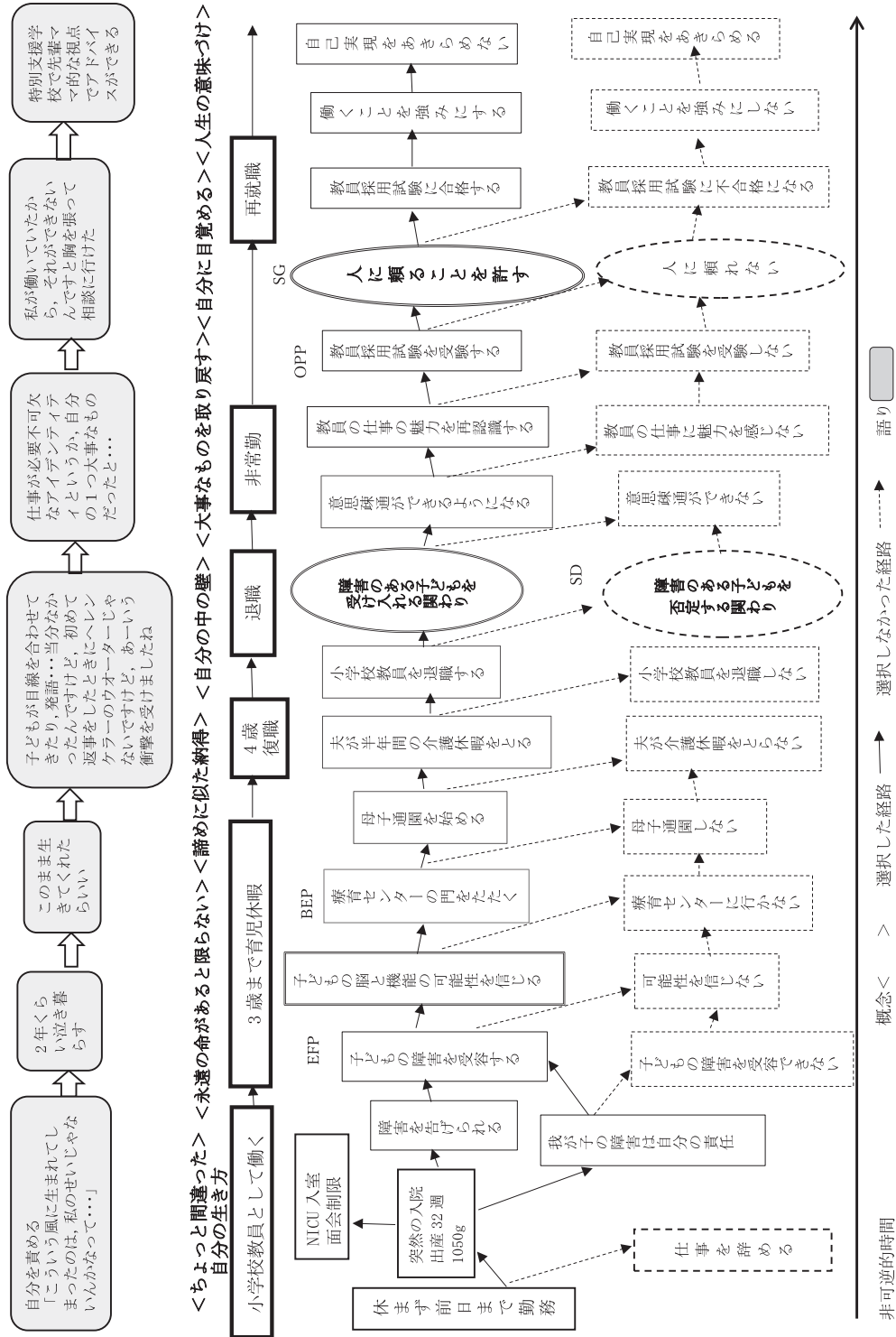


図1 障害児の母親が小学校教員として再就職に至るまでのプロセス

わよ。みたいな。自分のほうに主軸が戻ってきたく自分に目覚める>そういう感じでしたね。

最初は自分を責めていたんですけど、そこに自分自身の<人生の意味づけ>が後ろからやってきて、もうちょっと頑張れという気がして。普通の子たちを教えているときも体育出来ない子が落ち込んで、はぶてる子がいたとしてもできなかつたらできないなりの全力ってあるんよということをこの子を通して教えられたので…。

Aさんは、3歳まで育児休暇を習得し子育てに専念していた。3歳になり復職するが、代わりに1年間夫が介護休暇を修得する。4歳から療育センターに母子通園する。療育センターの先生が普通に「可愛い」と接しられた。そして、喋れないと思って諦めていたわが子が生まれて初めて喋ったことである。先生の子どもの関わりから、Aさんは、教員という仕事の魅力を再認識し、非常勤として小学校教員に復帰した。

子ども優先の考え方からAさん自身が主軸となり、子どもと共に人生を歩むという価値観に変化していった。

V. 考 察

厚生労働省障害児支援の在り方に関する検討会（2014）の中で、障害のある子どもを持つ親の就労に関する施策の方向性として「家族支援の充実」が示されている。さらに、ワーク・ライフ・バランスについて「保護者が子育てと就業とを両立させるための支援」が重要であり、「障害児支援」においても「ワーク・ライフ・バランスの観点を拡充していくべき」であるとしており、障害のある子どもを持つ親のワーク・ライフ・バランスを推進していくとの方向性が示されている。

Aさんは、小学校教員として勤務し結婚後も継続して勤務していた。次男の出産時は、順調と言われながら32週で突然の帝王切開での出産となった。出産後に脳室周囲軟化症と診断され子どもに障害のあることがわかった。Aさんが子どもの障害を知ったとき、障害をもって生まれたのは、自分のせいじゃなかと自責の念を抱いている。障害をもつ子どもを産んだ女性は、障害児の母親と周囲からみられる存在となる（中川，2003）。障害は自分の責任と感じ、その責任を背負わなければならないといった意識をもつようになる。仕事を一生懸命に行い、ストレスな仕事が子どもの障害の原因と考えていた。そして、Aさん自身が、障害のある子どものことを友達に話せず隠そうとしており、Aさん自身が障害を<自分の中の壁>としてとらえていた。

療育センターの通院は、一生縁のないところと考えており、失望感があり苦しい時期を過ごしている。しかし、療育センターに通院するようになり、同じ境遇の母親と話しをする機会が多くなった。障害児のとの出会い、家族のサポート体制が充実すること、障害児の成長が契機となり障害を重要していく母親がいる（岡崎，2008）。Aさんも同様に、母親たちと日常の些細な出来事を話せるようになり、少しずつ気持ちがあほぐれてきている。そして、自分を責めるのではなく、子どもの成長に目を向けるようになっていく。また、北原（1995）は、重症心身障害児の親は、生命危機や体調不良など現実の差し迫った問題に対する対応に対処するうちに、子どものわずかな変化を肯定的に捉え、絶対的な価値のあるものとして受け止めていくことが多いと報告している。

3年間の育児休暇を取得したのち、小学校教員として復帰している。仕事と子育ての両立が難しく、夫が半年間の介護休暇を取得し子育てのサポートをしている。母親の育児不安や育児負担感の効果的な支援として、ソーシャルサポートが母親の自己効力感と母親の自己肯定感に繋がる

(岩田, 2018)。Aさんも同様に夫や周囲のサポートにより、育児不安や育児負担感が軽減したと考えられる。

Aさんは小学校教員として復職したが、周囲の人に頼り仕事を続けることがよいのか、悩むようになり退職する。退職後に、声を出すことができず一度も喋れなかった子どもが初めて声を出した。子どもの成長を捉える事が母親の内面的支えの重要な要素(田中・西方・宮坂・倉田・住吉, 2017)となっており、子どもの成長を実感したことにより、小学校教員としての仕事の魅力を再認識するようになったと考えられる。

母親は不安なこと、悩みを感じている時には、家族や親戚、友人などの身近な人からのサポートを受けることにより、レジリエンスを高めることができる。また、地域のコミュニティや子育て支援を受けることも必要である(田村, 2017)。子どもの障害を受け止め、大切なわが子と認識することが大切である。子どもの将来を考えた時に、子育ては自分ひとりだけでなく、夫や近くに住んでいる両親や周囲の人たちを頼りながら子育てをしていくように考えが変化している。

Aさんは、子どもの成長を実感したことにより、少しずつ子育ての自信につながったと考えられる。さらに子育ての自信が母親としての自信にもつながり、レジリエンスを高めることにつながったと考えられる。肯定的な気持ちの変化が、教員採用試験の意欲に大きく影響し小学校教員として再就職への契機となったと考えられる。さらに仕事をしていることを強みとし、求援力が高まり周囲の協力を広げている。子どもとの「関係性」への関与の深さが、母親自身の発達・変容における重要な要素となる可能性がある(前盛, 2009)。

Aさんと子どもの関係は、互いが支え合い、共に成長している存在であると考えられる。

平成26(2014)年に障害者自立支援法から障害者総合支援法に改正され、共生社会を実現するために日常生活・社会生活の支援が見直されてきた。しかし、障害児を養育する親は、子どもの障害を受容するまでの葛藤や生活の制限による困難、家族や親族関係による心身の負担を感じている(中川・根津・宍倉, 2009)。さらに在宅ケアの担い手の95%以上が母親であるとの指摘がされている(石井, 2013)。母親が中心に障害児のケアを担うのではなく、家族や周囲の協力を得ながらケアを行っていくことが必要である。さらに、子どもの成長に応じた長期的な支援の構築が望まれる(田村, 2018)。

今後の課題として障害児の母親が自分らしく生きるために、自己実現が叶うように母親の育児や就労に伴う社会資源の整備やメンタルヘルスの支援が必要であろう。

VI. 結 論

Aさんが小学校教員として再就職に至ったプロセスは、障害児の成長を通して、教員という仕事の魅力を再認識したことである。そして、子ども優先の考え方から母親自身が主軸となり、子どもとともに人生を歩むという価値観に変化していった。母親の価値観の変化が、母親のレジリエンスを高める要因の一つになったと考えられる。教員という仕事は、Aさんにとっての生きがいであり、人生そのものである。障害のある子どもの存在により、母親が大切なものに気づき、自分自身を振り返る機会となった。

謝 辞

本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた、お母さまに心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

文 献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2009)：複線径路・等至性モデルのTEM 図の描き方の一例, 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- 石井由香理・中川 薫 (2013)：自分を犠牲にしないケア：重症心身障害児の母親の語りからみるケア意識, 保健医療社会学論集, 24 (1), 11-20.
- 岩田直子・中川勝 (2018)：医療的ケアを要する在宅重症心身障害児(者)の母親におけるレジリエンスとソーシャルサポートの関連, 小児保健研究, 77 (4), 328-337.
- 木下康仁 (1999)：グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生, 弘文堂.
- 木下康仁 (2003)：M-GTAグラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的実証研究の誘い, 弘文堂.
- 木下康仁 (2009)：質的研究の記述の厚み：M-GTA・事例・エスノグラフィー, 弘文堂.
- 前盛ひとみ (2009)：重症心身障害者の母親におけるアイデンティティ危機体験の状態の分類化および発達過程の分析, 第三部 教育人間科学関連領域, (58), 215-224.
- 中川薫 (2003)：重症心身障害児の母親の『母親意識』の形成と変容のプロセスに関する研究－社会的相互作用がもたらす影響に着目して, 保険医療社会学論集, 14 (1), 1-12.
- 中川薫・根津敦夫・宍倉啓子 (2009)：在宅重症心身障害児の母親が直面する生活困難の構造と関連要因, 社会福祉学, 50 (2), 18-31.
- 岡崎由美・遠藤芳子 (2008)：障害児をもつ母親の障害の受容までの期間と契機および現在の思い, 北日本看護学会誌, 11 (1), 7-10.
- サトウタツヤ (編) (2009)：TEMで始める質的研究 時間とプロセスを扱う研究をめざして, 誠心書房.
- 高波千代子 (2017)：札幌市における小児在宅医療施策の実態と課題, Annals, Public Policy Studies11, 179-198.
- 田村美子 (2017)：日本における母親のレジリエンスと影響要因に関する文献検討, 看護・保健科学研究誌, 17 (1), 176-185.
- 田村美子・船津守久・木下八重子・久木原博子・沖西 紀代子 (2018)：超重症児と共に生きる母親が困難を乗り越えるプロセス：複線径路・等至性モデル (TEM) による分析を通して, キャリアと看護研究, 8 (1), 24-33.
- 田中美央・西方真弓・宮坂道夫・倉田慶子・住吉智子 (2017)：重症心身障害児の反応に関する母親の内面的支え体験, 新潟大学保健学雑誌, 69-78.
- 安田裕子・サトウタツヤ編著 (2016)：TEMでわかる人生の径路, 誠信書房.

